

「は」と「が」の選択に関わる一要因

——定情報名詞句のマーカの選択要因との相関からの考察——

庵 功 雄

キーワード：定情報名詞句、トピックとの関連性、テキスト的意味の付与、デフォルト的意味関係、逆接的意味関係

要 旨

本稿では連文内の「は」と「が」の使い分けという問題を定情報名詞句（テキスト内で再度言及された名詞句）のマーカである「この」「その」の選択の原理と絡めて論じた。まず、天声人語七年分の全用例を調べ、「この」と「は」、「その」と「が」の結びつきやすさを見た。次にこうした分布が見られる理由を次のように説明した。即ち、「この」が持つ先行詞をテキストのトピックとの関連性から捉えるという性質は「その」が持つ先行詞を先行文脈からのテキスト的意味の付与という観点から捉えるという性質よりも無標であり、定情報名詞句のマーカとしては「は」は「が」よりも無標であるので、対象の捉え方の無標性を共有する「この」と「は」、対象の捉え方の有標性を共有する「その」と「が」は共に結びつきやすいのである。本稿の記述は連文内の「は」と「が」の選択に関わる一要因を明らかにするだけでなく、日本語における主題連鎖の研究という観点からも意義を持つ。

0. はじめに

「は」と「が」の相違に関しては多くの論考がある（e.g. 三上（1953）、久野（1973）、野田（1985）、Shibatani（1990）、佐治（1991））が、その分析は多くの場合、単文レベルのもので、連文レベルでの両者の選択には殆ど言及がない。

その中で、野田（1985：25）には次のような記述がある。

- (I) 15-1 主語が前に出てきた名詞と同じ名詞であり、その名詞について何かを伝えたいときは、主語に「は」を付ける。
- 15-2 主語が前に出てきた名詞を指す名詞「彼」「彼女」「これ」「それ」「この～」「その～」などであり、その名詞について何かを伝えたいときは、主語に「は」を付ける。（下線論者）

確かに次のような例を見るとこの指摘は正しいように見える（#は先行文脈とのつながりの悪さ（非結束性（incohesiveness）を表す）。

- (1) 日本で一番大きな湖は琵琶湖です。琵琶湖は/#が京都府の東の滋賀県にあります。（野田（1985））
- (2) 昔々あるところにおじいさんがいました。ある日、このおじいさんは/#が山へ

(2) 「は」と「が」の選択に関わる一要因

芝刈りに行きました。

- (3) 真夏の光をあびて、キョウチクトウの花が咲いている。公害に強いという宣伝がきいたためか、この花は(/??が)、工業地帯や高速道路ですっかりおなじみになった。 (天声人語 1985.7.23)

しかし、(I)の一般化には次のような体系的な反例が存在する。

- (4) 健は病気知らずが自慢の男だった。その健が/??はガンであっけなく逝ってしまった。
- (5) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その順子が/#は今は他の男の子供を二人も産んでいる。
- (6) もう1席の『かわり目』はお酒の話だ。小米朝落語というと、昨年演じた『たちぎれ線香』のように若旦那が活躍するネタが得意だというイメージがある。その彼が(/#は)、酔っぱらいのおっさんが主役のこのネタを演じる。
(『第2回桂小米朝独演会パンフレット』)

従って、(I)の一般化には修正が必要である。本稿ではこの点を定情報名詞句(後述)のマーカの選択の原理と絡めて論じてみたい。

1. 定情報名詞句のマーカと助詞の相関

1-1. 定情報名詞句とは

前節では連文レベルの「は」と「が」の使い分けについての野田(1985)の一般化を紹介し、それに合致する例と反する例を挙げた。本稿ではこうした例について考察するが、その前に先に見た例を次のように整理しておく。

- (II) a. 定情報名詞句が「この」「ゼロ」でマークされるときは「は」が使われやすく、「が」は使われにくい。
b. 定情報名詞句が「その」でマークされるときは「が」が使われやすく、「は」は使われにくい。

ここで言う「定情報名詞句」というのは次のようなものである。

- (III) テキスト(意味的に一体をなす文連続)内に導入された名詞句がそのテキスト内で再度言及された時、その名詞句を定情報名詞句と呼ぶ。

この定義に関して次の二点に留意されたい。第一は、「定情報(definite information)」は「定(definite)」の下位概念であるということである。従って(7)(8)のような総称名詞句や固有名詞句は初出時既に「定」であるが、^{注1}テキスト内で繰り返し用いられない限り「定情報」にはならない。

- (7) 酒には百害がある。が、人間はその酒がやめられない。 (総称名詞句)

- (8) 先日桂小米朝に会った。小米朝は桂米朝師の息子である。 (固有名詞句)

第二は、定情報名詞句は先行詞と同一物指示(coreferential)である名詞句であるということである。従って、同一名詞句が繰り返されている時だけでなく、(9)のように先行詞が言い換えられている時もこれに含まれる。

(9) 私は紅茶が好きだ。この飲物はいつも疲れを癒してくれる。

1-2. 調査とその結果

1-2-1. 調査の前提

1-1では定情報名詞句という概念を導入し、本稿で扱う問題を(II)のように規定した。ここでは(II)の傾向性を確かめるために行った調査の結果を述べる。調査では1985年～1991年の天声人語でガ格の定情報名詞句が指定指示の「この」「その」でマークされている全用例を対象とした(紙幅の関係上「ゼロ」は対象外とする)。なお本稿では「は」と「が」の対立を論じる関係上その対立が構文上中和する従属節の用法を含めるべきではないので、(10)のように「この/その」を含む名詞句が従属節に含まれる時も考察の対象外とした。

(10) 高校生だった王貞治さんに、日本国籍でないというので国体出場を断念させた事件を思い出した。[_s後年、その王さんが記録を達成すると]国民栄誉賞を贈る。
(1990.6.26)^{注4}

1-2-2. 調査の結果

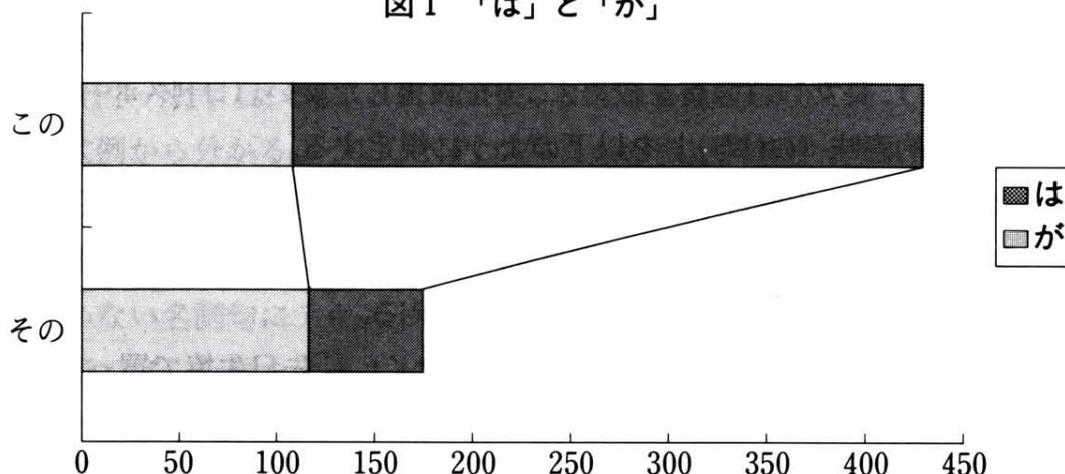
調査の結果は次の(表1)(図1)の通りである。

表1 「は」と「が」

	は		が		合計	
この	321	75 %	107	25 %	428	100 %
その	58	32.8 %	119	67.2 %	177	100 %
合計	379	62.6 %	226	37.4 %	605	100 %

$x^2=95.5$
(99.9%水準で有意)

図1 「は」と「が」



以上の結果から(II)の傾向性((IV)として再定式化)は統計的にも確認された。

(IV) 「この」は「は」と、「その」は「が」と結びつきやすい。

次の1-3では定情報名詞句のマーカ(「この」「その」)とその名詞句をマークする助詞(「は」「が」)の間にこうした相関が見られる理由を考察する。

(4) 「は」と「が」の選択に関わる一要因

1-3. 定情報名詞句のマーカ―とその名詞句をマークする助詞

1-2 では天声人語を対象とする調査の結果から定情報名詞句のマーカ―（「この」「その」）とそれをマークする助詞（「は」「が」）の間に(IV)のような相関が見られることを見た。一方、調査の対象とした文脈指示の指定指示用法の「この」と「その」は真正な意味で範列的(paradigmatic)な対立関係にある(cf. 庵(1996 b))。従って、(IV)で見られる「この」「その」と「は」「が」との相関の要因は「この」と「その」の選択に関わる要因から説明可能であるはずである。本節では、この考えに基づき、まず「この」と「その」の機能を規定し、それとの関連から(IV)を説明することを試みる。

1-3-1. 「この」と「その」の機能

前述のように、本稿では指定指示で使われる「この」と「その」の機能上の違いとの関連から(IV)を説明するが、その前に次の(V)を前提とする。^{注5}

(V) テキスト内で顕著な名詞句の捉え方は次の二通りである。

- a. トピックとの関連性という観点から捉える。
- b. テキスト的意味の付与という観点から捉える。

次に上の前提の中で使われている概念を規定する。

まず「トピック（との関連性）」を次のように規定する。

(VI) テキストの内容を1名詞句で要約する時、その名詞句をそのテキストの「トピック」、トピックを構成する意味上の諸要素の中で、特に重要度の高いものをそのトピックと関連性が高い名詞句と呼ぶ。

これを(11)を例に説明すると次のようになる。このテキストのトピックは「殺人事件」であり、そのトピックは殺人者、被害者、殺人現場、事件の日時等の要素から構成される。これらがトピックと関連性が高い名詞句である。

(11) 名古屋・中村署は、殺人と同未遂の疑いで広島市内の無職女性(28)を逮捕した。調べによると、この女性は20日午前11時45分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男(1)、長女(8)の首を絞め、二男を殺害した疑い。(日刊スポーツ 1992.11.22)

次に「テキスト的意味（の付与）」を以下のように規定する。

(VII) テキスト内で名詞句が繰り返されると定情報名詞句はその文脈内で限定される。この限定を「テキスト的意味」と呼び、限定を受けた名詞句には先行文脈からのテキスト的意味の付与があると考えられる。

例えば、(12)の実下線部の「本」は単なる本ではなく、「[先日生協で買って読んだ]本」である。この場合の「先日生協で買って読んだ」の部分にある限定が「テキスト的意味」であり、定情報名詞句（テキスト内で2度目に現れる「本」）にはテキスト的意味の付与がある。(cf. 庵(1996 b))

(12) 先日生協で本を買って読んだ。本は推理小説でなかなか面白かった。

こうした前提をした上で実例を観察すると、「この」だけが使える場合として次の3つの場合があることが分かる。

(VIII) a. 言い換えがある場合（例は(13)）

b. 遠距離照応の場合 (例は(14))

c. 先行詞への限定が多くない場合 (例は(15))

各々の例は次のようなものである。

(13) アオマツムシやツヅレサセコオロギに比べれば、カネタタキの鳴き声はいかにも遠慮深げで、かぼそい。この (/#その) 虫は低木や植え込みの葉の陰に遠慮深げにすんでいる。 (1985.9.16)

(14) ティラー民俗画展と題した珍しい美術展が開かれている。6月5日までは東京・渋谷のたばこと塩の博物館で、そのあと新潟など各地を回る。(13文略)折から全国でインド祭が催されている。この (/#その) 美術展はその一環だ。 (1988.5.21)

(15) 一茶にはなぜか現代の「政治資金」のありさまを活写したような句があります。(中略)《今迄は踏まれて居たに花野かな》この (/#その) 花野は竹の下にあったものだろう。 (1985.9.4)

これらの場合、先行詞を「テキスト的意味の付与」という観点から捉えることは困難であり、「トピックとの関連性」という観点からしか捉えられないと言えるが、それは次のような理由による。

まず(VIII)aの言い換えがある場合を考えるが、その前に、言い換えがない時先行詞(NP₁)と定情報名詞句(NP₂)は次のような関係にあることを確認しておく。

(IX) NP₁…NP₂ (ただし、NP₁=NP₂)

この場合、先行詞(NP₁)が定(固有名詞句/総称名詞句)であろうと不定(普通名詞句)であろうと、定情報名詞句(NP₂)が先行詞と照応していることは名詞句が繰り返されていることで保証されているので、定情報名詞句への一種の属性付与である、テキスト的意味の付与は相対的に容易であると考えられる。

これに対し、言い換えがある時のNP₁とNP₂の関係は次のようになっている。

(X) NP₁…NP₂ (ただし、NP₁≠NP₂でNP₂は普通名詞句)

従って、次例から分かるように、NP₂が何らかの限定詞を伴っていないと(先行詞と照応する読みでは通常)その外延(指示対象)を確定できない((16)bは(16)aと結びつかない単独の文としては文法的だが、そうではない(16)は非結束的な文連続となっている)。そのような外延が確定していない名詞句にテキスト的意味(一種の属性)を付与するのは困難であるので、こうした環境では先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えることは困難なのである。

(16) (a)私は [NP₁ 紅茶] が好きだ。#(b) [NP₂ 飲物] は疲れを癒してくれる。

次に、(VIII)bで先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えるのが困難なのは、テキスト的意味という付加的な情報を長期間記憶しておくのが短期記憶への負担になることによると考えられる。

最後の(VIII)cの場合は(VII)の定義から明らかである。

以上の議論から(VIII)の環境では先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えるこ

(6) 「は」と「が」の選択に関わる一要因

とは困難であることが明らかになった。一方、(V)の前提からテキスト内で顕著な名詞句の捉え方は(V)a、bのいずれかであり、しかもこの環境では(V)bの捉え方は困難であるので、結局、この環境では先行詞を(V)aのように捉えるしかない。しかも、(13)–(15)から分かるように、この環境では「この」しか使えない。よって、次の一般化が可能である。

- (XI) a. 「この」は先行詞をトピックとの関連性という観点から捉えていることを示すマーカーである。

ここまでは先行詞を(V)aのようにしか捉えられない場合を見てきたが、先行詞を(V)bのようにしか捉えられない文脈もある。次例を見られたい。

- (17) (a) 田中君は優しい性格でみんなに愛されていた。#(b) 田中君が通り魔に殺された。

(17)a と (17)b が非結束的だが、それは(この文脈において)b文が発せられるにはb文の「田中君」が「他人に殺されるはずがない」といった属性を持っている必要があるためと考えられる。即ち、この環境では「田中君」はそうした属性に関し中立的な単なる「田中君」ではなく、「優しい性格でみんなに愛されていた田中君」でなければならない。この下線部は先行文脈から定情報名詞句へ付与されたテキスト的意味であるので、この環境では先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えることが義務的であると言える。しかも、(17)' から分かるようにこの場合「その」しか使えない。

- (17)' 田中君は優しい性格でみんなに愛されていた。その/??この/# ϕ 田中君が通り魔に殺された。

以上のことから次のことが分かる。

- (XI) b. 「その」は先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである。

1-3-2. 「この—は」型と「その—が」型

前節では「この」と「その」の機能が(XI) a、bのように規定できることを見た。ここではそれを承け、「この」と「その」の機能の違いが(IV)に見られるような「は」や「が」との結びつきやすさと如何に相関するのを見る。

- (IV) 「この」は「は」と、「その」は「が」と結びつきやすい。

ここで最初に挙げた例をいくつか再掲しておく。

- (2) (a) 昔々あるところにおじいさんがいました。(b) ある日 この/??そのおじいさんは/#が山へ芝刈りに行きました。
- (3) (a) 真夏の光をあびて、キョウチクトウの花が咲いている。公害に強いという宣伝がきいたためか、(b) この(/#その)花は(/??が)、工業地帯や高速道路ですっかりおなじみになった。
- (4) (a) 健は病気知らずが自慢の男だった。(b) その/??この健が/??はガンであっけなく逝ってしまった。
- (5) (a) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。(b) その/??この順子が/#は今は他の男の子供を二人も産んでいる。

以上の例を見ると、(2)(3)のような「この」と「は」の組み合わせだけが許容されるタイプ（以下「このーは」型と呼ぶ）では定情報名詞句を含む文（各例のb文。以下定情報文）は先行文での叙述を継続・発展させる意味内容を持っている。例えば、(2)aは先行文で導入された「おじいさん」の行動を叙述している。一方、(4)(5)のような「その」と「が」の組み合わせだけが許容されるタイプ（以下「そのーが」型）では定情報文は先行文の叙述内容からなされる予測と対立する意味内容を持っている。例えば、(4)について考えると、(4)aを読んだ/聞いた段階で読み手/聞き手は「健は頑強な人だ」といった予測を持つ（予測は必ずしもこの通りでなくてもよい）が、(4)bの内容はその予測と対立する内容^{注6}を表している。以上をまとめると次のようになる。

- (XII) a. 「このーは」型は先行文脈の叙述内容を継続/発展させる意味内容を表す文で用いられる。
 b. 「そのーが」型は先行文脈の叙述内容と対立する意味内容を表す文で用いられる。

ここで、次のことを仮定する。

- (XIII) 連文間の意味関係は次のいずれかである。

- a. 先行文脈の内容と対立的な内容を述べる。 (逆接)
 b. 先行文脈の内容と非対立的な内容を述べる。 (非逆接)^{注7}

(XIII)bは(XIII)aの補集合をなす概念であり、「その反対の指定がなされない限り前提とされる」(de Beaugrande & Dressler (1981: 34)) 点でデフォルトの意味関係であると言える。以上のことから(XII)は次のように言い換えられる。

- (XIV) a. 「このーは」型はデフォルトの非逆接的意味関係を表す文で用いられる。
 b. 「そのーが」型は有標の逆接的意味関係を表す文で用いられる。

ではなぜ、「そのーが」型が有標の逆接的意味内容を表す文で使われるのかということになるが、その理由は次のように考えられる。

前述のように「その」は(17)のような先行詞を定情報名詞句へのテキスト的意味の付与という観点から捉える文脈で使われる。一方言い換えや遠距離照応では先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えることが困難であることから分かるように、テキスト的意味を短期記憶に保持することは読み手/聞き手の短期記憶の負担になる。従って、Leech (1983: cp. 3) らが言うように書き手/話し手は通常読み手/聞き手のテキスト解読 (decoding) が容易になるようにテキストを配列するというのが正しく、かつ、それにも拘わらず書き手/話し手がテキスト的意味の付与という観点から対象を捉えるという読み手/聞き手の負担になることを読み手/聞き手に敢えて要求するとすれば、その動機が有標の逆接的意味関係を表現することにあるというのは十分あり得ることであると考えられる。

以上は、有標の逆接的意味関係を表すために（「この」ではなく）「その」が使われる理由であるが、次にこの意味関係を表すために（「は」ではなく）「が」が使われる理由について考えてみたい。

「は」と「が」には様々な記述があるが、ここでは久野 (1973) などで言われている「「は」

(8) 「は」と「が」の選択に関わる一要因

は旧情報を、「が」は新情報を表す」という記述を採用し、その上で(18)(19)について考えてみる。

(18) (a) 健は病気知らずが自慢の男だった。(b) その健が/??はガンであっけなく逝ってしまった。(=(4))

(19) (a) 健は病気知らずが自慢の男だった。(b) その健??が/は先日の還暦祝いの時も1升瓶を一人で空けた。

(18)と(19)の違いはb文にある。この場合「その健」の部分は指示対象(外延)としてはどちらの文においても旧情報である。従って、他に妨げる要因がなければ(19)のように「は」でマークされることになる(デフォルトの場合)。ではなぜ(18)では「が」でマークされるのかということになるが、それは、(18)の場合には「その健」についての叙述内容がa文を読んだ/聞いた段階で読み手/聞き手が持つ予測の範囲外にあるという点で「その健」は属性(内包)としては新情報であり、そのために新情報を表す「が」でマークされるのだと考えられる。^{注8}もちろん、通常「AはB(だ)」という文のBの部分もAと比べると新情報だが、ここで言う情報の新旧はそうした単文レベルの問題ではなく、当該部分の叙述内容が先行文脈から喚起される予測の範囲内にあるか否かという連文レベルの問題である。なお、このように「AはB(だ)」のBの部分^{注9}が先行文脈から喚起される予測の範囲内にある命題である場合にそれが旧情報扱いされる(その結果Aは外延的にも内包的にも新情報扱いはされない)という現象は、次例の「原因」のように先行文脈内の要素(「火事」と連想関係のある名詞はテキストに初出であってもその連想関係から旧情報扱いされやすく、その結果「は」でマークされやすい(cf.野田(1995))というのと平行的な現象であると考えられる。

(20) 昨日湯の川温泉で大きな火事があった。原因は(/#が)、宿泊客の煙草の火の始末らしい。(野田(1995:一部改))

以上見てきたように、「その一が」型では、先行詞を定情報名詞句へのテキスト的意味の付与という観点から捉えるという「その」の性質と新情報を表す「が」の性質が呼応して、有標の逆接的意味関係が表されるのである。

次に、なぜ「この一は」型がデフォルトの非逆接的意味関係を表すのかを考える。

上述のように、「この」が表すトピックとの関連性という捉え方は(例えば(VIII)a-cのような文脈でも使えるといった点からも分かるように)「その」が表すテキスト的意味の付与という観点からの捉え方よりも無標であり、その点で「この」は「その」よりもデフォルトの意味関係を表すのに適している。

一方、この環境の定情報名詞句は外延的にも旧情報であるし、それについての叙述が先行文脈の叙述を継続/発展させるものである点で内包的にも旧情報であり、そのために旧情報を表す「は」でマークされると考えられる。

このように、「この一は」型では、先行詞をトピックとの関連性という観点から捉えるという「この」の性質と旧情報を表す「は」の性質が呼応し、デフォルトの意味関係を表すことになるのである。

1-3-3. その他の場合

1-3-2では「この一は」型と「その一が」型についてみてきた。(表1)からも「この/その」と「は/が」の組み合わせの中ではこの二つが典型的であると言えるが、それ以外の「この一が」「その一は」という組み合わせが存在するのも事実であるので、ここではこの場合について簡単に見ておく。

- (21) [スミソニアン協会は]1846年、英国の科学者スミソンが「人類の知識の増加と普及のために」と、米国政府に贈った遺産で設立された。その遺志をいまも守っているわけで、高度な研究機関が、子どもたちまで含めた国民教育の機関を兼ねているかたちだ。(1文略) このスミソニアンが、14日から3日間、東京で日本の聴衆を対象にセミナーを開く。(1985.5.13)
- (22) 病院跡の慰霊碑のそばに、1本のエノキがある。被爆して、幹は根元近くから、裂けるように折れていて、枝もなければ、葉もない。このエノキが、5月に入って芽を吹いた。(1985.6.3)
- (23) ある市民が社会党の地方議員に年金のことで相談に行った。きちんとした説明がなく、結局、よくわからないまま終わった。やむなく別の野党の地方議員の所に行った。その議員は本部と連絡をとり、しっかりと調べた上で答えてくれた。(1986.9.1)
- (24) 別の病で、長期間闘病を続けている遺伝学者、柳沢桂子さんとの励まし合いが、栗田さんを支えてきたことは前にも書いた。その柳沢さんは、動けなくなってから自然の美しさをずっと深く味わえるようになったという。(1986.8.23)

(21)(22)が「この一が」型の、(23)(24)が「その一は」型の例である。

まず、「この一が」型について考えると、このタイプは「その一が」型と類似した意味内容を表す。ただし、「その一が」型が先行文脈と対立的な意味内容(逆接)を表すのに対し、「この一が」型は主に先行文脈との対比性を表す。例えば、(22)では「枝も葉もない」という属性と「芽を吹く」という属性が対比されており、(21)では「米国」の機関であるスミソニアンが「日本」の聴衆に対してセミナーを開くという部分に対比性が見られる。なお、前田(1995)が指摘するように逆接と対比は連続性を持つことから「その一が」型と「この一が」型は連続することになり、「この一が」が許容される場合「その一が」も許容されることが多い。

一方、「その一は」型は固有名詞句と結びつきにくいなど「その一が」型とあまり類似しない、むしろ「この一は」型に近い性質を持っている。なお、(24)のように「その一は」型が固有名詞句と結びつく時は「一方その…の方は」と言い換えられるような所謂「対比のハ」の意味になることが多く(ただし、(19)のように対比性が希薄な場合もある)、この点では「この一が」型と連続する。^{注10}

以上のことから、「この/その」と「は/が」の組み合わせと連文における意味関係の間には次のようなスケールの関係が存在すると考えられる。

(10) 「は」と「が」の選択に関わる一要因

(XV) ←対立性/有標性大 対立性/有標性小→

その一が > この一が > その一は > この一は

2. ま と め

本稿では連文における「は」と「が」の選択という問題を定情報名詞句のマーカ―の選択要因との関連で論じ、その結果「この」は「は」と「その」は「が」と結びつきやすいことが分かった。^{注11}これは「この」「その」が持つ先行詞の捉え方の違いと「は」と「が」の機能の違いの相互作用によるもので、その結果「この一は」型はデフォルトの非逆接的意味関係を表すのに対し、「その一が」型は有標の逆接的意味関係を表すことになる。また、両者を両極としたスケールの中に「この一が」型と「その一は」型も位置付けられる。本稿の記述により連文における「は」と「が」の選択に関わる多くの要因の一部が明らかになったのではないかと思う。本稿の記述はさらに、日本語における主題連鎖(topic continuity. cf. Givón (ed. 1983))の研究という観点からも意義を持つものである。

【参考文献】

- 庵 功雄 (1995) 「コノとソノ」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (複文・連文編)』 619-631. くろしお出版
- (1996 a) 「「それが」とテキストの構造」『阪大日本語研究』 8, 29-44. 大阪大学日本語学講座
- (1996 b) 「指示と代用」『現代日本語研究』 3, 73-91. 大阪大学現代日本語学講座
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』 ひつじ書房
- 野田尚史 (1985) 『セルフマスターシリーズ 1 はとが』 くろしお出版
- (1995) 「ハとガ」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (単文編)』 277-286. くろしお出版
- 前田直子 (1995) 「逆接を表わす「～のに」の意味・用法」『東京大学留学生センター紀要』 5, 99-123. 東京大学
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』 くろしお出版から再版 (1972)
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店
- de Beaugrande, R. & Dressler, W. (1981) *Introduction to text linguistics*. Longman
- Clancy, P. M. & Downing, P. (1987) “The use of *wa* as a cohesive marker in the Japanese oral narrative” in Hinds, J. et al. (eds.) *Perspectives on the topicalization*. 3-56. John Benjamins.
- Givón, T. (1978) “Definiteness and referentiality” in Greenberg, J. H. (ed.) *Universals of human language*. 291-330. Stanford University Press.
- (ed. 1983) *Topic continuity in discourse*. John Benjamins.
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. Longman.
- Leech, G. (1983) *Principles of pragmatics*. Longman.
- Shibatani, M. (1990) *The languages of Japan*. Cambridge.

注1 本稿では、文中で用いられている名詞は、定一不定、総称一非総称、固有一普通などの区別

によらず全て「名詞句」であるとする。

注2 指定指示は(本稿に關与的な部分のみ述べると) (ア)のように「この」「その」全体で先行詞と照応する用法である (cf. 庵 (1995))。

(ア) 昨日近所ですしを食べた。この/そのすしはうまかった。

注3 従属節の中には「は」を含み得るものもあるが (cf. 南 (1974))、議論を単純にするためこの調査では従属節は全て考察対象としない。

注4 以下、日付だけの用例は全て天声人語からのものである。

注5 この(V)a と(V)b は対立的な概念ではなく、テキスト内で顕著な (salient) 名詞句は両者を併せ持つと考える。なお、全ての定情報名詞句が顕著であるわけではない。これは(イ)のように定情報であっても「この」でも「その」でも指せない例があることから分かる。

(イ) 昨夜国道で乗用車がポストに接触後ガードレールに激突するという事故があった。この事故で2人が死亡し、#この/#その/φポストは折れた。

注6 「その一が」型が持つこのような性格は、接続詞「それが」「それを」などとも共通するものである。この点については庵 (1996 a) を参照されたい。

注7 これは所謂「順接」に当たる。

注8 (ウ)bのように、その文の叙述内容が先行文脈からの予測の範囲外にあるときに「その一が」型が用いられるということについては Givón (1978) に指摘があるが、そのことに関する説得的な説明はない。

(ウ) お姫様は幸せでした。

a. お姫様はたくさんの友達がありました。

b. そのお姫様が狼に襲われた。(Givón (1978))

注9 (表1)における「この」と「その」の使用総数の分布(「この」が「その」の約2.5倍使われている)もこのことの傍証となる。

注10 「その一は」型の今一つのタイプは次のようなものである。

(エ) 健は病気知らずが自慢の男だった。しかし、その健はガンであっけなく逝ってしまった。(cf. (4))

先に、「その一が」型は逆接的意味内容を表すと述べた。(エ)にはその逆接的意味内容を表す接続詞「しかし」が含まれている。この場合に「が」ではなく「は」が使われるのは、逆接的意味内容を表すという「が」が担っていた機能が「しかし」に委譲されたためであると考えられる。つまり、やや比喩的に言えば「しかし」に機能を移した有標の「が」が無標の「は」に降格したのである。

注11 本稿の調査対象は「天声人語」だけであるので、「定量的に」(表1)のような分布が全てのテキストタイプに見られるか否かについては別の調査が必要である(テキストタイプによる違いについては Clancy & Downing (1987) も参照されたい)。本稿で主張したいのはあくまで、テキストタイプの違いによらず「機能的には」(XV)のようなスケール性が存在するということである。

———橋大学留学生センター専任講師———

(平成8年10月7日 受理)

(平成9年1月13日 改稿受理)